

editor.0

世に出でし文人指にあまるさへ誇ることなし酒よりほかに 中川昭「百代」より



友愛の人と呼ばれ、
眼差しの人と呼ばれ、
作家の魂のアンカーと呼ばれ、
最後の無頼派と呼ばれた**編集者**

河出書房新社の元文藝編集長 長田洋一（おさだ よういち）
1979年から2002年までの長田洋一の出版史と
2003年から現在まで。
長田洋一の本に係る活動を伝えながら、一貫して貫抜かれた
長田洋一の「本」を愛した姿を追ったドキュメンタリー。

監督 川口ひろ子

制作 信州の老編集者「本の寺子屋と係る」制作委員会
ナレーション 高瀬がぶん 熊井貴子

音楽 吉本直紀

出演 長田洋一・福島泰樹・正津勉・佐藤直子・高橋博・山口泉
窪島誠一郎・上條史生・中野友美

2024.11.16 Sat

18:00 OPEN / 18:30-19:50 上映

20:00-20:30 監督トーク

¥1,500（定員 15 人）

藤棚 デパートメント

横浜市西区中央 2-13-2 伊勢新ビル 1F（西横浜駅・戸部駅から各徒歩 15 分）



ARCADE BOOKS & Films

<https://arcadebooks.co>



私が出逢った表現者 長田洋一

駆け出しの、雑誌「文藝」編集者時代、大岡昇平、中野重治、埴谷雄高、武田泰淳、竹内好など戦後派作家の聲咳に接したことが、その後、文芸編集者として影響大だったような気がします。

また、上記次世代の詩人・吉本隆明、詩人・谷川雁、詩人・小説家の辻井喬などにも。そして、ほぼ同時代人としての丸山健二、中上健次、立松和平、三田誠広、小嵐九八郎、ノンフィクション作家の佐野真一、沢木耕太郎、後藤正治、評論家の松本健一、歌人の小野茂樹、福島泰樹、中川昭などは評価し得る作品群を発表しています。

干刈あがた、増田みず子、松浦理英子、劇作家でもある柳美里、林京子、津村節子、瀬戸内寂聴、宮尾登美子、児童文学の高山栄子、歌人の水原紫苑、道浦母都子、安永落子、小説も執筆なされた斎藤史、俵万智など女性の書き手とは、接し方の距離感が取れず、あまり良い編集者ではありませんでした。ただ、干刈さんは、年齢が比較的近く、時代的共有密度が濃かったせいか頻繁にお目にかかっていました。

また評論家の秋山駿、江藤淳、川村二郎、小説家の三浦哲郎、水上勉、田中小実昌、吉村昭、井出孫六、森敦、筒井康隆、久世光彦、長部日出雄なども忘れられない書き手です。

若い書き手として出逢った田中康夫、高橋源一郎、島田雅彦、山口泉、藤沢周、中沢けい、評論家の斎藤美奈子などは、燦然たる輝きを放ってデビューした方々でした。

劇作家の清水邦夫、井上ひさし、矢代静一、脚本家の早坂暁、演出家の木村光一、蜷川幸雄、映画監督の今村昌平、大島渚、吉田喜重、加藤泰、深作欣二、役者の菅原文太、太地喜和子などは奇才ともいべき方々です。

俳句では飯田龍太、齋藤慎爾、歌人の塚本邦雄、詩人の谷川俊太郎、荒川洋治、正津勉、学問の世界では、国文学者の松田修、社会学の上野千鶴子、政治学の姜尚中、歴史学の色川大吉、経済学の西部邁、ドイツ文学者の池内紀でしょうか。いずれも稀有な方々。

最後になりますが、ノンフィクション作家の本田靖春、鎌田慧、柳田邦男、木内宏、吉岡忍、松下竜一などが心動かされる書き手でしょうか。



長田洋一

1944年、大邱(てく)に生まれる。
1945年、母と引揚げ船で松江港入港直前に撃沈。
同年8月に敗戦。
父親が台湾から帰国し、
復職に伴って家族は転勤により、国内を転々とする。
虚弱であったため、本に親しんだ。
1960年安保に16歳。
国会前のデモには長田と同様に多くの高校生も参加していた。
17歳、長い入院生活の後、結核性腎臓病のため右腎臓摘出。

早稲田闘争の大学生時代に、色川大吉と出逢う。
文学から民俗学、歴史学、文化人類学へと視野が広がり、
大学時代から始まる長い放浪生活を送る。
長田はかねてから誘われていた河出書房新社に、
文芸誌「文藝」担当者として入社する、34歳だった。
長田は、戦後生まれの新しい書き手たちを育て、戦中、戦後派の書き手を励まし続けた。
2002年、体力の限界に達し退社。安曇野へ居を移し、治療生活が始まる。
2012年、塩尻市立図書館で「本の寺子屋」始まる。
人工透析の生活に入ってから、17年がたっている。
中上健次と立松和平、辻井喬も、松下竜一も他界している。

